

## 新 おおさか KEYワード 【第9回】

# アートが人を励まし、街を活気づける 「なにわの企業が集めた絵画の物語」はつづく

新型コロナウイルス感染症は、美術館や博物館にも大きな影響を与えている。私のいる大阪大学総合学術博物館も、特別展「なんやこりゃEXPO'70—大阪万博の記憶とアート」が4月に開催できず、館内消毒や入館制限を実施して、やっと6月末に開催できる状態だった。

大学の授業そのものも、オンラインでしか学生に接し得ない日々が続き、いまだに全部が対面授業になったわけではない。皆さんもまた、職場や家庭で大変なご苦勞をなされていることと思う。

私が監修させていただいているコーポレート・アート・コレクション「なにわの企業が集めた絵画の物語」展も、コロナ問題への対応を迫られてきた。

展覧会は関西経済同友会の主催で、大阪中之島美術館の開館を応援する目的もあって2年前から始まり、第3回の今回が最終回となる。会期は、本号刊行より少し先だが、令和3年1月30日から2月13日まで、会場は大阪府立江之子島文化芸術創造センターである。(詳しくは公式ホームページ参照)

関西経済同友会は、終戦後の昭和21(1946)年に設立され、「社会のオピニオン・リーダーの一員たる企業経営者が個人の資格で参画し、時代を一步先取りして自由に大胆に発言・行動する」ことを理念に謳う。大阪・関西の文化力向上を目指して「文化の力委員会」が結成され、自分たちの所蔵美術品を集めた展覧会が企画され、開催されてきたのである。

この美術展には重要な課題がある。一つはフィランソロピー(Philanthropy)である。博愛や人類愛などに基づいた奉仕の精神を指し、大阪市中央公会堂を寄付した岩本栄之助をはじめ、昔から大阪には寄付の精神が息づき、街を発展させてきた。そのことを関西経済同友会は実践しようとするのである。

もう一つは「対話型鑑賞法」による教育プログラムの実施である。幼少期に美術館・博物館に連れて行ってもらった体験のある人は、大人になって自分の子どもたちを館につれていくという研究がある。本展覧会も小学校を招待し、作品を前にした「対話型鑑賞法」によって子どもたちの感性を養うことで人間的成長をうながすとともに、そのことが都市の文化的発展に大きく寄与することを期待する。

ところが今回の新型コロナウイルス感染症は、自粛により市民を展覧会に出向きにくくし、小学生を呼ぶことも難しくした。

優雅な水鳥も、水面下では必死に足をもがく。緊急事態宣言が出されたときは、予定通り開催できるかが問題となり、会場に行くのが無理ならばオンラインで鑑賞することは可能かどうか、いや、やはり美術作品は、実物を自分の目で直接見ることが大切ではないかという議論や、「対話型鑑賞法」の実現可能性の議論も重ねられた。

対応策の検討などの苦心が実って今回の開催となった訳だが、マリー・ローランソンの油彩画や、藤田嗣治の珍しいポスターなどが疲れた心を癒やしてくれるだろうし、大阪が生んだ洋画家である小出楯重や鍋井克之、佐伯祐三の作品には、「大大阪」と呼ばれた時代(大正後期~昭和初期)の活力を再確認できるだろう。

近代都市に必要な施設として昭和10(1935)年、大阪の政財界が中之島に「新大阪ホテル」(現リーガロイヤルホテル)を建設し、そこに開業時から掛けられていた安井曾太郎《薔薇》なども華やかな時代の雰囲気も華やかな時代の雰囲気を伝えている。

特別な企画として、そのほか大阪市内を屋外ミュージアム(エコミュージアム)と見なし、各所にあるモニュメントや壁画を案内する映像も会場で公開する予定であり、芸術が都市の活力や市民生活と密接であるかを再認識してもらえたらと思っている。

新しい大阪中之島美術館の開館も迫り、コロナを越えて「文化の力」は街を変えることができるか、それが新しい年の課題となるだろう。



戦前の「新大阪ホテル」パンフレットでも客室に《薔薇》が飾られている。



現在は最高級客室「ロイヤルスイート」の室内階段の上に《薔薇》が飾られている。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の現象—」(創元社)など。